

シンポジウム

膀胱癌の治療の進歩・化学療法ならびに尿路変向術・再建術

司会の言葉

金沢大学医学部

久住治男

奈良県立医科大学

平尾佳彦

膀胱癌は多彩な発生・進展様式をとるが、乳頭状・非浸潤性と非乳頭状・浸潤性のものに大別され、前者は膀胱保存的治療が可能で術後にしばしば再発がみられるが予後はよく、一方、後者は根治的膀胱全摘術などの外科治療の対象となるが、その治療成績ならびに患者の Quality of life (QOL) は必ずしも満足できるものではない。膀胱癌の治療成績の向上には、浸潤膀胱癌に対する治療体系の確立が重要課題と考える。最近の浸潤膀胱癌の治療における進歩として、予後の改善を目的とする抗腫瘍化学療法を中心とした集学的治療と、患者の QOL の改善を目指した尿路変向・再建術があげられる。集学的治療で完全緩解がえられるならば生存率の向上と膀胱機能の温存が図られ、また膀胱機能を十分に代用できる膀胱再建術が確立されれば根治的膀胱全摘術が広く受け入れられよう。この両者の進歩は膀胱癌の治療成績向上に大きく寄与するものと考えられるが、現時点では未だ確立されていないのが現状である。

このシンポジウムでは、集学的治療の一環として、特に術前・術後の補助化学療法および種々の補助治療法について、その現況と問題点について討論を行った。T2~3 の局所浸潤膀胱癌では neoadjuvant chemoradiotherapy により近接効果ならびに予後の改善がえられることが明らかにされ、術後の補助化学療法についてもその有用性を示唆する結果が示された。T4 の膀胱癌では M-VAC による neoadjuvant 療法では満足できる成績はえられていないが、regimen 完遂の重要性が強調され、さらに化学療法、放射線療法ならびに温熱療法などの併用療法によく反応し、外科治療で病巣が摘除できた症例では予後の改善が期待しうることが明らかとなった。しかしながら、進行癌や手術不適症例に対しては、CISCA, CAP および M-VAC 療法などの抗腫瘍化学療法、放射線療法および温熱療法の併用による優れた治療効果が示されたが、一時的な近接効果がえられるものの生存率の向上には未だ至っていないのが現状である。進行癌の治療適応は確立したものはなく、現在の近接治療効果の高い治療法を患者の performance status に合わせて併用する集学的治療を試みる以外に方策がないことが報告された。浸潤膀胱癌に対する治療法として、現時点では外科治療が浸潤膀胱癌に対する治療の基本であり、これを凌駕する治療法はないが、種々の治療法を併用することにより治療成績の向上が図れることを明らかにした。さらに各々の治療法について prospective randomized study を行い、その有用性を評価することの重要性と、抗腫瘍剤のみならず各々の治療方法に対する感受性試験の確立の必要性が強調された。

尿路変向術・再建術のそれぞれの手術成績と現況についてみると、各施設とも現時点では合併症が比較的少なく、早期に社会復帰の可能な回腸導管を尿路変向術の基本としており、1年以上の生存が期待できる PS2 以下で腸疾患のない症例を対象とし、回腸導管が適応にならない症例には尿管瘻を適応している。一方、非失禁型尿路変向を導入している施設では尿路変向の対象症例の45%に同手術を施行しており、手術手技は Kock pouch や、より簡便な ileal patch 法による Indiana pouch などが試みられている。さらにより快適な自然排尿の可能な代用膀胱による膀胱再建術が試みられ、脱盲腔右結腸を用いた優れた成績が報告された。本中部総会においても Hautmann 教授から ileal neobladder が報告され膀胱再建術に対する関心が高まっているが、尿道再発、腸管の選択および晚期合併症など解明すべき課題が残されており、これらの基礎的な研究成果を積み上げ

て膀胱再建術が着実に発展することを期待する。

浸潤膀胱癌の治療にはまだまだ解決すべき課題は山積しているが、浸潤膀胱癌の治療が単に近接効果の向上や生存期間の延長のみを目的とするのではなく、患者の QOL を考慮にいれて治療成績が着実に向上して行くものと確信する。浸潤膀胱癌の治療の大きな転換期において、時期をえたテーマを与えて頂きました前川正信大会会長に敬意を表します。

(Received on April 30, 1991)
(Accepted on May 21, 1991)